

研究論文

中学生の怒りへの対処に関する研究の動向

下田 芳幸^{*1} ・ 寺坂 明子^{*2} ・ 石津 憲一郎^{*3} ・ 大月 友^{*4}

A review of anger coping research among junior high school children

Yoshiyuki SHIMODA, Akiko TERASAKA, Kenichiro ISHIZU, and Tomu Ohtsuki

【要約】2001年以降の中学生を対象とした怒りへの対処研究をレビューした。その結果、攻撃行動といった不適応的な対処に関する研究が多く、こういった不適切な対処は社会的不適応のリスクを高めること、感情調節や共感性などからのアプローチが有益である可能性が示された。また、適応的な怒りへの対処に関する研究が少なく、尺度開発を含めた研究の必要性が明らかとなった。

【キーワード】中学生、怒り、攻撃性、怒りへの対処

問題と目的

文部科学省(2018)によると、平成29年度に中学校の管理下・管理下以外における暴力行為の発生件数は28,702件であり、前年度から1,500件近い減少となった。国立および私立中学校も調査対象となった平成18年度以降は、平成21年度の43,715件をピークに減少傾向にある。しかし、千人あたり8.5件の発生頻度であり、割合としては低いとはいえず、暴力行為の予防に関するさらなる求められる。

中学生は一般的に思春期・青年期(または青年期前期)に位置づけられるが、この時期に呈されることの多い不適応行動には、暴力など攻撃行動や反社会的行動といった問題行動を中心とする外在化問題と、抑うつや不安といった自身の内部で生じるネガティブな変化を主とする内在化問題がある(Achenbach & Edelbrock, 1979)。怒り・攻撃性はこのうち、外在化問題としての非行行為(望月・伊藤・原田・野田・松本・高柳・中島・大嶽・田中・辻井, 2014)などのみならず、抑うつや不安などとも関連が深いこと(伊藤・神谷・吉橋・宮地・野村・谷・辻井, 2010; Kerr & Schneider, 2008)¹、外在化問題と内在化問題を併発している

児童が一定数いることや、学校における怒りと抑うつがともに高い児童生徒の存在が実証されている(Epkins, 2000; 寺坂, 2011a)。したがって、児童の心理的・社会的適応を考える際、怒り・攻撃性を考慮することが重要であるといえる。

ところで、心理学領域における怒り・攻撃性の研究では、怒り・攻撃性を感情・認知・行動の構成要素に分けて捉える怒りの3次元モデル(Anger-Hostility-Aggression model; AHAモデル, Spielberg, Krasner, & Solomon, 1988)に依拠することが多い。アンガーマネジメントなど学校で実施される怒りへの予防・介入方法の多くが、このうち少なくとも一つの次元をターゲットとしていることから(Smith, Furlong, & Boman, 2006)、AHAモデルは、怒り・攻撃性の実証研究および実践において有用であるといえる。本研究ではこのうち、学校臨床心理学等でのコンサルテーションや心理教育を通じた具体的な心理的支援への応用を念頭に、行動的次元としての怒りへの対処について、中学生を対象とした近年の国内外の研究動向を整理する。

なお怒り・攻撃性に関しては、自他へのメッセージ的機能を有したり、集団場面における義憤に

^{*1} 佐賀大学大学院学校教育学研究科 ^{*2} 大阪教育大学 ^{*3} 富山大学 ^{*4} 早稲田大学

基づく秩序の維持といった適応的な機能も伴うことが指摘されており(詳しくは遠藤, 2013 や Evans, 2001 遠藤訳 2005 などを参照), 怒り感情が生じることそのものが心理学において問題視されることはない。学校臨床心理学においては, 喚起された怒り感情について, 適切に対処・コントロールすること²に主眼があるといえる。

そこで本研究では, 怒り・攻撃性に対する対処(コーピングや感情調節)の研究を中心にレビューする。なお, これまでの研究知見を幅広く整理するという観点から, 怒り感情を伴う攻撃行動や関係性に悪影響を与えるような怒り表出といった, 適応的に機能しにくい行動³にも言及している。

先行研究の収集

本研究では, 怒りへの対処に関する近年の研究動向に焦点を当てるため, 2001 年以降に発表された実証的な心理学系の論文を対象とした。

英語論文の検索には, American Psychological Association が提供する PsycINFO およびエルゼビア社が提供する Science Direct を利用した。いずれも対象を中学生相当の年齢層に設定し, 論文タイトルまたはアブストラクトに *anger* を含む実証的な研究を検索対象とした。日本語の論文については, 国立情報学研究所が提供する CiNii および科学技術振興機構が提供する J-STAGE を用いた。検索には, 中学生・生徒・思春期のいずれかと, 怒り・攻撃性のいずれかをそれぞれ組み合わせて用い, 実証的な研究をレビューの対象とした。

以上の結果, 英語論文 15 本, 日本語論文 34 本が対象となった。なお英語論文・国内の論文いずれにおいても, 論文によっては調査対象に中学生以外の年齢層を含むため, 小学生相当の世代の子どもに限った知見ではないものがある。

不適応的な怒りへの対処に関連する要因

今回収集された論文のうち, 直接的な攻撃行動などの不適応的な怒りへの対処に関する研究をまとめる。

Sullivan, Helms, Kliewer, & Goodman (2010)

が行った, 小学 5 年生と中学 2 年生の子どもを対象とした調査によると, 不本意な感情表出が他者への関係性攻撃を高めること, また怒り感情調節の程度によって身体的攻撃の頻度が異なることが示されている。感情調節については, 6—8 年生を対象とした 7 ヶ月間隔の 2 波の縦断研究においても, 攻撃行動は時間的な変化をコントロールしてもなお, 感情理解・非調整的感情表出・反すうから構成された感情調節からの影響を受けていた (McLaughlin, Hatzenbuehler, Mennin, & Nolen-Hoeksema, 2011)。

続いて, 共感性に関する研究をまとめる。Belgrave, Nguyen, Johnson, & Hood (2011) は, 11—14 歳を対象に調査を行い, 共感性・アンガーマネジメントスタイル・攻撃性への規範的信念・人種的アイデンティに関する変数を用いたクラスター分析を行い, その特徴を検討している。その結果, 適応不良クラスターまたは共感性の低いクラスターに属する女子は顕在的攻撃や関係性攻撃得点が高いこと, 適応不良クラスター, アンガーマネジメントの低いクラスターおよびアイデンティの低いクラスターに属する男子は顕在的攻撃得点が高い, といった結果が得られている。また 6—13 歳を対象とした調査によって, 共感性が高いと自己評定する子どもは両親・教師・友人の評定による怒り表出が低い傾向にある, という結果も示されている (Roberts, Strayer, & Denham, 2014)。そのほか, 共感性のうち視点取得が身体的攻撃と関係性攻撃と負の関連を示すこと (村上・西村, 櫻井, 2014), あるいは, 共感性と攻撃行動との関連の強さは, 他者との同調性の程度によって変化することが示されている (尾棹・野中・森田・嶋田, 2017)。

以上の研究から, 感情調節や共感性が, 怒り表出や攻撃行動と関連することが実証されており, 心理的支援を図る際に重要なポイントになりうると思われる。

日本においてはその他にも, 自尊感情との関連を検討したものがいくつか確認された。その中で, 直接的な攻撃行動との関連を検討した松下・村松

(2006)は、自尊感情が低いと怒り感情や身体的・言語的攻撃得点が高い傾向にあることを報告している。一方で、自尊感情の高低と怒りの適切なコントロールとの関連が見いだせなかったとする報告もあり(野瀬・前田・五十嵐, 2010)。この点に関連して、自尊感情の安定性が攻撃性と関連するといった報告(松原・藤生, 2005)や、自尊感情を抱く領域や対象の違いにより、怒り反応(小澤, 2007)や身体的・言語的攻撃(久保・吉田, 2009)が異なってくる、とするものがある。したがって自尊感情を取り上げる際には、その安定性や領域・対象の違いといった視点が必要と思われる。

学校に関する要因については、怒りの頻度が多いほど、そして女子は教師との関係で喚起される怒りが多いほど、攻撃的な怒り対処が実行されやすいこと(藤井, 2004)、身体的・言語的攻撃と学校ストレスが正の、学級雰囲気や学校享受感情が負の関連を示すこと(金山, 2007)や、教師ストレスや規則ストレスが身体的・言語的攻撃と正の関連を示す(金山, 2008)といった研究が確認できた。また、学校における怒り・攻撃性の研究で、慢性的な怒りと学校における破壊的な表出が関連すること(寺坂, 2011b)、あるいは学校での怒りの破壊的な表出と正の関連を示すこと(下田・寺坂, 2014)などが報告されている。なお、学級満足度尺度(河村, 1999)における不満足群は満足群より反応的攻撃性や攻撃評価などの得点が高いこと、侵害行為認知群は満足群より仲間支配夜級やや攻撃有能感が高いこと(桑原・濱口, 2008)、あるいは不登校傾向群は身体的攻撃得点も高いという研究も確認された(高柳・伊藤・大嶽・野田・大西・中島, 2012)。怒り・攻撃性は学校適応を考える上で重要な観点であることを示す結果である。

次に友人関係との関連では、良好な友人関係と身体的・言語的攻撃が負の相関を示すこと(田中・栗山・園田・柴田, 2002)、友人への同調性と怒りの言語的表出(杳名・中島・五十嵐, 2011)や関係性攻撃(櫻井・小浜・新井, 2005)が関連することが明らかとなっている。なお、言語的攻撃が

友人関係における関係向上と正の相関を示す(塚本・濱口, 2003)、あるいはソーシャルサポートと言語的攻撃が正の相関を示す(金山, 2007)といった研究がある。崔・庄司(2015)の研究でも自己制御のうち自己の考えの主張が、ネガティブ事象への反応的攻撃の報復意図と正の関連を示していることから(崔・庄司, 2015)、言語的攻撃が有する機能や特徴については、さらなる検討が必要であろう。

その他の心理的要因については、自己愛傾向と言語的攻撃との間にやや強い正の相関があること(相良・相良, 2006)、男子における自身の身体満足度が身体的攻撃に負の、運動能力評価が身体的攻撃に正の、そして男子のみ言語的攻撃にも正の関連を示すこと(上長・齊藤, 2011)、逸脱行為に対する主張や自己の欲求の抑制がネガティブ事象への反応的攻撃と負の関連を示すことが報告されている(崔・庄司, 2015)、あるいは社会的達成目標のうち社会的熟達接近目標は身体的・関係性攻撃と負の、社会的熟達回避目標は関係性攻撃と負の、社会的遂行接近目標は身体的攻撃と正の、そして社会的遂行回避目標が関係性攻撃と正の関連を示す(海沼・櫻井, 2018)といった研究がみられた。さらに、小中学生を対象とした大規模研究により、教師評定・保護者評定による注意欠如多動傾向のうち、多動性・衝動性が言語的攻撃性と正の関連を示すという報告もある(野田・岡田・谷・大西・望月・中島・辻井, 2013)。

中学生はいわゆる反抗期とかなりオーバーラップする世代であるためか、こういった不適応的な怒りや攻撃行動に関する研究はかなり多くなされているのが現状である。

個人の規範意識・信念との関連

ところで、7—13歳の男子を対象に場面想定法を用いた研究で、攻撃的で医学的ケアもしくは特別な支援を必要とする男子は、「リベンジするのが義務だ」といった、モラルルールへの言及が多い一方、そういった子どもたちは、自分の反応が人間関係にネガティブな結果をもたらすことも分か

っている、ということが示された (de Castro, Verhulp, & Runions, 2012)。また、怒りへの対処に関するものではないが、9—16 歳を調査した研究において、健康へのネガティブな影響の背景に、怒りにまつわる反すう傾向が関連することを示したものがある (Miers, Rieffe, Terwogt, Cowan, & Linden, 2007)。

日本における検討では、怒り場面を敵意的に解釈する傾向は攻撃行動と正の関連を示し、そのことを考えないようにする傾向とは負の関連を示すという結果 (日比野・湯川・小玉・吉田, 2005) や、関係性攻撃における敵意的な原因帰属スタイルは実際の関係性攻撃と正の関連を示すこと (梅津・新井・濱口, 2012)、日常的ないらだちや敵意が強いほど怒りを不適切に表出しやすいこと (寺坂, 2011b)、他者への攻撃をいじめと認識しにくい生徒は攻撃行動を取りやすいことを報告した研究 (下田, 2018) がある。

このように個人の信念・態度や原因帰属スタイル、反すう傾向といった認知的要素は、怒りへの対処に大きく影響するといえ、さらなる知見の蓄積が必要であると思われる。なお、小中学生の横断研究によると、年齢が上がると暴力や暴力者のポジティブな面をよりポジティブに、ネガティブな面はあまりネガティブでないように認知する傾向にある (山口・中條・前田, 2002)。認知的側面を検討する際には、こういった発達的变化にも留意する必要があるだろう。

不適応的な怒りへの対処がもたらす影響

こういった不適応的な怒りへの対処が、本人のメンタルヘルスや社会的適応に悪影響を及ぼす可能性を示す研究もある。例えば 6—13 歳を対象とした Roberts et al. (2014) の調査では、怒り表出がいじめ加害とも関連していた。日本においても、敵意的攻撃性がいじめにおける加害者行動や傍観者行動と一定程度の関連を示すことが報告されている (朝倉, 2004)。さらに望月ら (2014) の調査によると、攻撃性、特に身体的攻撃と非行行為との間に関連が見られている。その他、怒り喚起場

面で自己の防衛または怒りを喚起させた嫌悪事象に危害を加えることを目的とした反応的攻撃性と、怒りの喚起を必ずしも伴わず、ある目的達成の手段として実行される攻撃行動である能動的攻撃概念を用いた研究では、反応的攻撃性が抑うつと正の、そして男子では反社会的行動欲求と正の関連を示すことや、同じく男子では能動的攻撃性も反社会的欲求行動と正の関連を示すことが報告されている (濱口・石川・三重野, 2009)。

また、11—14 歳を対象とした短期縦断調査では、怒り感情の不適切な調節が、3 ヶ月後の暴力被害経験と関連していた (Spence, De Young, Toon, & Bond, 2009)。その他日本における調査では、関係性攻撃傾向の強い生徒は、学級満足度尺度の被侵害得点が高いという報告がある (櫻井ら, 2005)。このように不適応的な怒りへの対処は、攻撃行動などの加害側のみならず、被害側の立場に立たされるリスク要因にもなり得るといえよう。

他にも、アルコールや薬物摂取、非行行為といったリスクを伴う行動を選択するか否かといった点との関連を検討した研究もあった。9 歳と 16 歳の時点で調査を行った研究によると、感情調節と感情表出がともに困難な子どもは、薬物乱用や不適切な問題行動が多いこと、さらに感情調節の低い子どもは、性的接触を持った相手の数が多かった (Hessler & Katz, 2010)。また、Kim-Spoon, Holmes, & Deater-Deckard (2015) の 10 歳から 15 歳にかけての長期縦断研究によると、気質的な怒り傾向は、上記のようなリスクを伴う行動選択とある程度関連すること、一方で、注意のコントロールが怒りの増加に伴うリスクを伴う行動選択の抑制要因になる可能性が示唆されている。また、Gambetti & Giusberti (2016) の 12—16 歳を対象とした調査によると、学校における破壊的行動や学校に対する敵意的態度がリスクを伴う行動選択と関連する可能性が示唆されている。このように怒りへの不適応的な対処は、リスクを伴う行動選択も促進する可能性があり、適応的な対処ができるように支援することの重要性が改めて確認されたといえよう。

なお相関的研究ではあるが、意欲減退・身体的

不全傾向が身体的攻撃と正の相関を示すといった研究（田中・栗山・園田・柴田，2001）がある一方で、伊藤ら（2010）の小中学生を対象とした大規模調査では、身体的攻撃が弱いながら抑うつ気分を低下させる可能性が示唆されている。身体的攻撃が抑うつと正の相関関係にあるのか、あるいはネガティブ感情の発散などの結果として抑制的な機能をもつのか、今後の検討が必要である。

適応的な怒りへの対処に関する研究

次に、怒りへの対処のうち、適応的に機能する可能性のあるもの⁴に関する研究をまとめる。

5年の間をあけた2波のパネルデータを用いた研究によると、怒りに対する対処方略として、相手との対決と傷つけ、注意の再方向付け、無視、自己非難は子ども期（9—13歳）が青年期（14—18歳）より高い一方、ユーモアは青年期の方が高かった（von Salisch & Vogelgesang, 2005）。

日本におけるユーモア研究は主に大学生などの成人を対象としたものであるが、ユーモアの表出形態に関する尺度作成により、攻撃的ユーモア表出・自虐的ユーモア表出・遊戯的ユーモア表出の3因子が見出され、攻撃性が攻撃的ユーモア表出と、愛他性が遊戯的ユーモア表出と、そして自己受容が自虐的ユーモア表出および遊戯的ユーモア表出と関連することが示されている（塚脇・樋口・深田，2009）。また、遊戯的ユーモア表出と自虐的ユーモア表出が周囲からのソーシャルサポートの促進を介して不安を軽減するといった、精神健康上の影響も認められている（塚脇・深田・樋口，2011）。子どもに関する研究としては、塚脇（2018）が小中学生を対象に学校適応との関連を調査し、中学生男子ではユーモアと学校適応との関連は見出されなかったが、女子については攻撃的ユーモアが教師や級友との関係に負の影響を及ぼし、自虐的ユーモアが級友との関係や学習への意欲と正の関連を示すことを報告している。これらの結果を踏まえると、例えば3つのユーモア表出の、怒りへの対処行動としての機能や心理的・社会的適応に対する影響についての検討などが、学校臨床

における支援の上で有益と考えられる。今後の研究が待たれるところである。また、怒り体験を他者に話すといった怒りの社会的共有は、男子よりも女子で行いやすいことが示されており（寺坂，2011b）、言語を用いた表出の仕方やその適応への影響は男女で異なる可能性があるため、この点を考慮した研究が望まれる。

その他の研究としては、11—14歳を対象とした2時点データの分析により、注意の向け直しやソーシャルサポートといった建設的な怒り感情調節が、その後の互惠的友人関係に正の影響を及ぼすことを明らかにした研究（von Salisch, Zeman, Luepschen, & Kanevski, 2014）、自分に関するストレスが学校での怒りへの積極的な対処と正の関連を示すこと（下田・寺坂，2014）、2波のパネルデータを用いた研究で、ポジティブな自動思考が3ヶ月後の学校における積極的な対処に正の影響を及ぼすといった結果（下田・寺坂，2015）、11—15歳を対象としたいじめの場面想定法による検討により、ゆるし（forgiveness）が、場面の回避や復讐といった対処と比べていじめに起因する怒りを最も低減するといった報告（Watson, Rapee, & Todorov, 2017）が確認された。しかしこういった研究は数が少なく、さらなる検討が必要であろう。

また、怒りへの対処の有効性に関して、Wainryb, Pasupathi, Bourne, & Oldroyd (2018) は、8—17歳を対象に実験的研究を行い、怒りを感じた際に他者に語ることが、テレビゲームで気を紛らわすより直後の発散効果は低いが効果が持続することを示している。このような、怒りへの対処の有効性は、具体的な支援を計画する際にも重要な観点であり、他の対処行動についての検討をはじめとする知見の蓄積が重要である。

なお、3—5年生を対象に1年半追跡調査した縦断調査では、怒り感情に関する感情調節得点は、年齢が上がると減少する、といった結果が得られている（Eschenbeck, Schmid, Schröder, Wasserfall, & Kohlmann, 2018）。これはいわゆる反抗期としての行動特徴と合致する知見であり、日本における同様の知見を積み重ねることで、中学生におけ

る怒りの感情調節の変化やそれを踏まえた支援を行っていくことが必要であろう。

日本の生徒の怒り・攻撃性を測定する尺度

ここまで怒りへの対処に関する先行研究を展望したが、攻撃行動のように不適応的の可能性が高い怒りへの対処に比べ、適応的に機能する可能性のある怒りへの対処に関する研究は少ないのが現状である。特に日本における知見は非常に乏しい。表情規則をはじめ感情にまつわる文化差（遠藤，2013；北山・内田・新谷，2007）を考慮すると、日本の中学生を対象とした研究の発展が待たれる。

特に、適応的に機能する可能性がある怒りへの対処を幅広く測定できる尺度が存在していないことから、まずは尺度の開発が待たれるところである。そこで参考として本節では、日本の中学生を対象とした怒りに関する尺度の概略をまとめる。

日本においては1990年代に、アメリカで作成されていた Buss-Durkee Hostility Inventory (BDHI : Buss & Durkee, 1957) とその改訂版の Aggression Questionnaire (AQ : Buss & Perry, 1992) を参考に、敵意的攻撃インベントリー（秦，1990）や、中学生用攻撃性質問紙（Hostility-Aggression Questionnaire for Students, HAQS ; 大竹・島井・曾我・嶋田，1998；嶋田・神村・宇津木・安藤，1998）が作成された。このうち敵意的攻撃インベントリー（秦，1990）は小学5年生から高校生までを対象としており、身体的暴力・敵意・いらだち・言語的攻撃・間接的攻撃・攻撃の置き換えの6下位尺度からなる。一方の HAQS（大竹ら，1998；嶋田ら，1998）は、短気・敵意・身体的攻撃・言語的攻撃の4下位尺度で構成される。

これらのうち、敵意的攻撃インベントリーは、すでに触れた塚本・濱口（2003）、朝倉（2004）で、そして HAQS は、既述の松下・村松（2006）、金山（2007，2008）、久保・吉田（2009）、上長・齋藤（2011）で使用されているほか、P-F スタディでの反応的攻撃の表出に関する検討（森崎，2016）などでも用いられている。

また、HAQS の小学生版である HAQ-C (Hostility-

Aggression Questionnaire for Children ; 坂井・山崎・曾我・大芦・島井・大竹，2000) を参考に玉木（2016）が、表出性攻撃と不表出性攻撃の2下位尺度からなる中学生用攻撃性質問紙の作成を試みているほか、教師評定用の尺度（玉木・山崎・松永，2002）が開発され、それを用いた Crick & Dodge（1994）の社会的情報処理モデルにおける検討もなされている（玉木・山崎，2004）。

なお HAQ-C は中学生にも適用されており、すでに述べた田中ら（2001，2002）、伊藤ら（2010）、高柳ら（2012）、野田ら（2013）、望月ら（2014）のほか、HAQ-C 短縮版の合計得点と反応スタイル（村山・伊藤・高柳・松本・田中・野田・望月・中島・辻井，2014）、性別違和感（浜田・伊藤・片桐・上宮・中島・高柳・村山・明翫・辻井，2016）やソーシャルサポート（村山・伊藤・大嶽・片桐・浜田・中島・上宮・野村・高柳・明翫・辻井，2016）との関連性を検討したものや、後述する村山・伊藤・高柳・上宮・中島・片桐・浜田・明翫・辻井（2017）の研究がある。なお、野田・伊藤・浜田・上宮・片桐・高柳・中島・村山・明翫・辻井（2016）は HAQ-C を用いて小学3—5年生を4年間追跡調査し、合計得点としての攻撃性は特性一状態モデルの適合度が最も高く、小学生から中学生にかけて、特性的な安定性が増すことを実証している。

怒りを幅広い次元で捉えるその他の尺度としては学校における怒り・攻撃性を怒り体験・皮肉的態度（または敵意）・破壊的表出・積極的対処の3次元4下位尺度から捉える学校での怒りの多次元尺度（Multidimensional School Anger Inventory, MSAI ; Furlong, Smith, & Bates, 2002）の日本語版（下田・寺坂，2012a，2012b）があり、先述の下田・寺坂（2014，2015）といった使用例がある。

その他の尺度に関して、先述の能動的攻撃や反応的攻撃を測定する尺度（濱口，2005，2007）が、既に述べた桑原・濱口（2008）、濱口ら（2009）、崔・庄司（2015）において用いられている。

より焦点を絞った尺度に関して、藤井（2003）は怒りを感じる場面に焦点を当てた中学生版怒り尺度を作成し、学校嫌い感情が強いと怒り状態の

得点も高いことを報告している（藤井，2006）。

また、桜井（2003）が海外で作成された Anger Response Inventory – Adolescent（Tangney, Hill-Barlow, Wagner, Marschall, Borenstein, Sanftner, Mohr, & Gramzow, 1996）の日本語版として作成した思春期版怒り反応尺度や、関係性攻撃傾向尺度（桜井ら，2005），怒り感情尺度（武部・岸田・伊藤・高橋・佐藤，2017），対人場面ごとに怒り表現（内向性・外向性・コントロール）を問う対人場面別怒り表現尺度（反中，2008；使用例として野瀬ら，2010）がある。

なお、攻撃行動に特化し、身体的・言語的・関係性攻撃を測定するものとして中学生用攻撃行動尺度（高橋・佐藤・野口・永作・嶋田，2009）が作成されており、先に述べた村上ら（2014），海沼・桜井（2018），下田（2018）が使用している。

最後に、本研究に関連の深い怒りへの対処に関する尺度としては、攻撃・援助・抑制の3下位尺度からなる怒り対処尺度（藤井，2004）や、情動調節方略として反すう・気晴らし・問題解決・認知的再評価の4下位尺度構成を報告した村山ら（2017）がある。村山ら（2017）は小中学生を対象とし、情動調整のうち反すうが HAQ-C 合計得点と正の、問題解決が負の関連を示すといった結果を得ている。ただし怒りへの適応的・向社会的対処という観点から見た場合、これらの尺度では幅広い対処行動を十分に測定可能とはいえず、今後の尺度開発が待たれるところである。

まとめと今後の課題

今回の研究展望により、中学生については攻撃行動などの不適応的な対処を中心に多くの研究がなされていること、適応的な怒りへの対処に関する研究が不十分であることが明らかとなった。今後は、反抗期という中学生の特徴を踏まえつつ、特に適応的な怒りへの対処に関する知見の蓄積が必要であろう。そのためにまず、文化的な特徴を考慮した、怒りへの適応的・向社会的な対処に関する尺度を開発し、発達段階に即した特徴を検討していく必要があると思われる。

こういった基礎的な知見を踏まえ、予防的・成長促進的な心理教育プログラムの開発、とりわけ現在の教育カリキュラム、具体的には保健体育、特別活動、特別の教科「道徳」に組み込みやすい内容の心理教育プログラムを開発し、エビデンスに基づく支援の実践研究を検討することが求められる。

＜注＞

- 1 子どもの抑うつ症状には、意欲や集中力の低下や抑うつ気分のみならず、イライラ感や攻撃的な行動も含まれる（傳田，2002；石川，2013）。
- 2 ここでいうコントロールには、一般的にイメージされる適切な抑制のみならず、心理的または社会的に適応的な機能を有する表出行動も含まれる。
- 3 例えば感情表出などは、反応なのか主体的なものであるか、議論が分かれるところである。本研究では、表出も行動の一形態と捉え、レビューの対象に含んでいる。
- 4 怒りを抑制したりその場を離れたりするといった回避的行動は、直接的な表出でないという意味で不適応的とは断言できないが、心理的な不安全感や自己への攻撃性を増す可能性があるという意味で、必ずしも適応的とも言えない点に留意する必要がある。

付記

本研究は、科学研究費助成事業の助成を受けて行われた（課題番号：18K03099，研究代表者：下田芳幸）

引用文献

- Achenbach, T. M., & Edelbrock, C. S. (1979). The Child Behavior Profile: II. Boys aged 12–16 and girls aged 6–11 and 12–16. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 47, 223-233.
- 朝倉隆司 (2004). 中学生におけるいじめに関わる役割行動と敵意的攻撃性、共感性との関連性 学校保健研究, 46, 67-84.

- Belgrave, F. Z., Nguyen, A. B., Johnson, J. L., & Hood, K. (2011). Who is likely to help and hurt? Profiles of African American adolescents with prosocial and aggressive behavior. *Journal of Youth and Adolescence*, 40, 1012-1024.
- Buss, A. H., & Durkee, A. (1957). An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 343-349.
- Buss, A. H., & Perry, M. (1992). The Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 452-459.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- 崔 玉芬・庄司一子 (2015). 中学生の自己制御が攻撃性に及ぼす影響 筑波大学発達臨床心理学研究, 26, 11-16.
- de Castro, B. O., Verhulp, E. E., & Runions, K. (2012). Rage and revenge: Highly aggressive boys' explanations for their responses to ambiguous provocation. *European Journal of Developmental Psychology*, 9, 331-350.
- 傳田健三 (2002). 子どものうつ病——見逃されてきた重大な疾患—— 金剛出版
- 遠藤利彦 (2013). 「情の理」論——情動の合理性をめぐる心理学的考究—— 東京大学出版会
- Epkins, C. C. (2000). Cognitive specificity in internalizing and externalizing problems in community and clinic-referred children. *Journal of Clinical Child Psychology*, 29, 199-208.
- Eschenbeck, H., Schmid, S., Schröder, I., Wasserfall, N., & Kohlmann, C.-W. (2018). Development of coping strategies from childhood to adolescence: Cross-sectional and longitudinal trends. *European Journal of Health Psychology*, 25, 18-30.
- Evans, D. (2001). *Emotion: A very short introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- (エヴァンズ, D. 遠藤利彦 (訳・解説) (2005). 1冊でわかる 感情 岩波書店)
- 藤井義久 (2003). 中学生版怒り尺度の作成 感情心理学研究, 10, 34-41.
- 藤井義久 (2004). 中学生の怒り喚起場面における対処行動に関する研究 感情心理学研究, 11, 24-31.
- 藤井義久 (2006). 中学生の学校嫌い感情と怒りとの関連 感情心理学研究, 13, 39-48.
- Furlong, M. J., Smith, D. C., & Bates, M. (2002). Further development of the Multidimensional School Anger Inventory: Construct validation, extension to female adolescents, and preliminary norms. *Journal of Psychoeducational Assessment*, 20, 46-65.
- Gambetti, E., & Giusberti, F. (2016). Anger and everyday risk-taking decisions in children and adolescents. *Personality and Individual Differences*, 90, 342-346.
- 浜田 恵・伊藤大幸・片桐正敏・上宮 愛・中島俊思・高柳伸哉・村山恭朗・明翫光宜・辻井正次 (2016). 小中学生における性別違和感と抑うつ・攻撃性の関連 発達心理学研究, 27, 137-147.
- 濱口佳和 (2005). 自記式能動的攻撃性尺度 (中学生用) の構成 カウンセリング研究, 38, 183-194.
- 濱口佳和 (2007). 自記式反応的攻撃性尺度 (中学生用) の構成 カウンセリング研究, 40, 136-145.
- 濱口佳和・石川満佐育・三重野祥子 (2009). 中学生の能動的・反応的攻撃性と心理社会的不適応との関連——2 種類の攻撃性と反社会的行動欲求および抑うつ傾向との関連—— 教育心理学研究, 57, 393-406.
- 秦 一士 (1990). 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, 61, 227-234.
- Hessler, D. M., & Katz, L. F. (2010). Brief report: Associations between emotional competence and adolescent risky behavior. *Journal of Adolescence*, 33, 241-246.

- 日比野桂・湯川進太郎・小玉正博・吉田富二雄 (2005). 中学生における怒り表出行動とその抑制要因——自己愛と規範の観点から—— 心理学研究, 76, 417-425.
- 石川信一 (2013). 子どもの不安と抑うつに対する認知行動療法——理論と実践—— 金子書房
- 伊藤大幸・神谷美里・吉橋由香・宮地泰士・野村香代・谷 伊織・辻井正次 (2010). 小中学生の攻撃性——特性不安および抑うつとの関連からの検討—— 精神医学, 52, 489-497.
- 海沼 亮・櫻井茂男 (2018). 中学生における社会的達成目標と向社会的行動および攻撃行動との関連 教育心理学研究, 66, 42-53.
- 上長 然・齋藤誠一 (2011). 思春期の身体発育が攻撃性に及ぼす影響 青年心理学研究, 23, 133-146.
- 金山健一 (2007). 中学生の攻撃性を規定する諸要因の検討——学級雰囲気測定尺度との関連—— 函館大学論究, 38, 57-72.
- 金山健一 (2008). 中学生の攻撃性を生起する学校ストレス要因の検討 函館大学論究, 39, 1-18.
- 河村茂雄 (1999). 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(1) ——学校生活満足度尺度(中学生用)の作成—— カウンセリング研究, 32, 274-282.
- Kerr, M, A., & Schneider, B, H. (2008). Anger expression in children and adolescents: A review of the empirical literature. *Clinical Psychology Review*, 28, 559-577.
- Kim-Spoon, J., Holmes, C., & Deater-Deckard, K. (2015). Attention regulates anger and fear to predict changes in adolescent risk-taking behaviors. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 56, 756-765.
- 北山 忍・内田由紀子・新谷 優 (2007). 第7章 文化と感情——現代日本に着目して—— 藤田和生(編)感情科学 (pp.173-210) 京都大学出版会
- 久保元芳・吉田沙織 (2009). 中学生における攻撃性と特定領域別セルフエスティームとの関連 宇都宮大学教育学部紀要 (第一部), 59, 77-88.
- 杳名翔子・中島綾香・五十嵐哲也 (2011). 中学生の友人関係スタイルと怒り表出との関連 愛知教育大学保健環境センター紀要, 10, 23-31.
- 桑原千明・濱口佳和 (2008). 中学生の能動的・反応的攻撃性の学校生活満足度による差の検討 教育相談研究, 45, 65-73.
- 松原弘泰・藤生英行 (2005). 中学生における自尊心感情の不安定さと攻撃性・うつとの関係 上越教育大学心理教育相談研究, 4, 25-38.
- 松下加代子・村松常司 (2006). 中学生の攻撃性とセルフエスティーム, 社会的スキルとの関係 東海学校保健研究, 30, 47-60.
- McLaughlin, K. A., Hatzenbuehler, M. L., Mennin, D. S., & Nolen-Hoeksema, S. (2011). Emotion dysregulation and adolescent psychopathology: A prospective study. *Behaviour Research and Therapy*, 49, 544-554.
- Miers, A. C., Rieffe, C., Terwogt, M. M., Cowan, R., & Linden, W. (2007). The relation between anger coping strategies, anger mood and somatic complaints in children and adolescents. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 35, 653-664.
- 望月直人・伊藤大幸・原田 新・野田 航・松本 かおり・高柳伸哉・中島俊思・大嶽さと子・田中善大・辻井正次 (2014). 中学生の非行行為と攻撃性, 抑うつとの関連 精神医学, 56, 4-11.
- 文部科学省 (2018). 平成 29 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省 Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm (2018 年 12 月 22 日)
- 森崎雅好 (2016). 非敵意的フラストレーション状況における中学生の反応的攻撃表出者の内的特徴——中学生用攻撃性質問紙 (HAQ-S) と P-F スタディを用いて—— 応用教育心理学研究, 32, 3-14.

- 村上達也・西村多久磨・櫻井茂男 (2014). 小中学生における共感性と向社会的行動および攻撃行動の関連——子ども用認知・感情共感性尺度の信頼性・妥当性の検討—— 発達心理学研究, 25, 399-411.
- 村山恭朗・伊藤大幸・大嶽さと子・片桐正敏・浜田 恵・中島俊思・上宮 愛・野村和代・高柳伸哉・明翫光宜・辻井正次 (2016). 小中学生におけるメンタルヘルスに対するソーシャルサポートの横断的効果 発達心理学研究, 27, 395-407.
- 村山恭朗・伊藤大幸・高柳伸哉・松本かおり・田中善大・野田 航・望月直人・中島俊思・辻井正次 (2014). 小学高学年・中学生用反応スタイル尺度の開発 発達心理学研究, 25, 477-488.
- 村山恭朗・伊藤大幸・高柳伸哉・上宮 愛・中島俊思・片桐正敏・浜田 恵・明翫光宜・辻井正次 (2017). 小学校高学年児童および中学生における情動調節方略と抑うつ・攻撃性との関連 教育心理学研究, 65, 64-76.
- 野田 航・伊藤大幸・浜田 恵・上宮 愛・片桐正敏・高柳伸哉・中島俊思・村山恭朗・明翫光宜・辻井正次 (2016). 小・中学生の攻撃性はどの程度安定しているか——潜在特性・状態モデルを用いたコホートデータの多母集団同時分析—— 発達心理学研究, 27, 158-166.
- 野田 航・岡田 涼・谷 伊織・大西将史・望月直人・中島俊思・辻井正次 (2013). 小中学生の不注意および多動・衝動的行動傾向と攻撃性, 抑うつとの関連 心理学研究, 84, 169-175.
- 野瀬めぐみ・前田友美・五十嵐哲也 (2010). 中学生の自尊感情と被受容感のバランス状態からみた友人関係場面における怒り表現の検討 愛知教育大学保健環境センター紀要, 9, 53-59.
- 尾棹万純・野中俊介・森田典子・嶋田洋徳 (2017). 中学生における共感性および同調性が攻撃行動に及ぼす影響 ストレスマネジメント研究, 13, 58-66.
- 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子・嶋田洋徳 (1998). 中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) の作成 (1)——中学生のデータによる因子的妥当性・信頼性の検討—— 日本心理学会第 62 回大会論文集, 930.
- 小澤永治 (2007). 思春期における領域別自尊感情と怒り情動反応の関連 心理臨床学研究, 25, 593-599.
- Roberts, W., Strayer, J., & Denham, S. (2014). Empathy, anger, guilt: Emotions and prosocial behaviour. *Canadian Journal of Behavioural Science*, 46, 465-474.
- 相良陽一郎・相良麻里 (2006). 自己愛と攻撃性の関係について 千葉商大紀要, 43(4), 37-59.
- 坂井明子・山崎勝之・曾我祥子・大芦 治・島井哲志・大竹恵子 (2000). 小学生用攻撃性質問紙の作成と信頼性, 妥当性の検討 学校保健研究, 42, 423-433.
- 桜井美加 (2003). 思春期版怒り反応尺度 (日本語版) の作成 心理臨床学研究, 21, 255-265.
- 櫻井良子・小浜 駿・新井邦二郎 (2005). 中学生における関係性攻撃傾向の検討——同調行動および学校適応感の関連—— 筑波大学発達臨床心理学研究, 17, 39-44.
- 嶋田洋徳・神村栄一・宇津木成介・安藤明人 (1998). 中学生用攻撃性質問紙 (HAQS) の作成 (2)——因子的妥当性, 信頼性, 因子間相関, 性差の検討—— 日本心理学会第 62 回大会論文集, 931.
- 下田芳幸 (2018). 中学生のいじめ認識傾向と攻撃行動との関連性 佐賀大学大学院学校教育学研究科紀要, 2, 21-28.
- 下田芳幸・寺坂明子 (2012a). 学校での怒りの多次元尺度日本語版の信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 83, 347-356.
- 下田芳幸・寺坂明子 (2012b). 学校での怒りの多次元尺度日本語版の短縮化 富山大学人間発達科学部紀要, 7(1), 129-138.
- 下田芳幸・寺坂明子 (2014). 小中学生における学校での怒りとストレスとの関連性の検討 富山大学人間発達科学部紀要, 8(2), 1-9.

- 下田芳幸・寺坂明子 (2015). 中学生の学校での怒りと自動思考との関連性の検討 ストレスマネジメント研究, 11, 114-122.
- Smith, D. C., Furlong, M. J., & Boman, P (2006). Assessing anger and hostility in school settings. In S. R. Jimerson & M. J. Furlong (Eds.), *The handbook of school violence and school safety: From research to practice* (pp.135-145). New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Spence, S. H., De Young, A., Toon, C., & Bond, S. (2009). Longitudinal examination of the associations between emotional dysregulation, coping responses to peer provocation, and victimisation in children. *Australian Journal of Psychology*, 61, 145-155.
- Spielberger, C. D., Krasner, S. S., & Solomon, E. P. (1988). The experience expression and control of anger. In M. P. Janisse (Ed.), *Individual differences, stress and health psychology*. New York: Springer Verlag. pp. 89-108.
- Sullivan, T. N., Helms, S. W., Kliewer, W., & Goodman, K. L. (2010). Associations between sadness and anger regulation coping, emotional expression, and physical and relational aggression among urban adolescents. *Social Development*, 19, 30-51.
- 高橋 史・佐藤 寛・野口美幸・永作 稔・嶋田洋徳 (2009). 中学生用攻撃行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究, 35, 53-66.
- 高柳伸哉・伊藤大幸・大嶽さと子・野田 航・大西将史・中島俊思・望月直人・染木史緒・辻井正次 (2012). 小中学生における欠席行動と抑うつ, 攻撃性との関連 臨床精神医学, 41, 925-932.
- 武部匡也・岸田広平・佐藤美幸・高橋 史・佐藤寛 (2017). 子ども用怒り感情尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 行動療法研究, 43, 169-179.
- 玉木健弘 (2016). 中学生用攻撃性質問紙 (AQS) の作成と信頼性, 妥当性の検討 武庫川女子大紀要 (人文・社会科学), 64, 51-60.
- 玉木健弘・山崎勝之 (2004). 中学生の攻撃性, 社会的情報処理過程ならびにストレス反応の関連性 学校保健研究, 46, 242-253.
- 玉木健弘・山崎勝之・松永一郎 (2002). 中学生用攻撃性質問紙教師版(AQS-T)の作成と信頼性および妥当性の検討 徳島文理大学研究紀要, 64, 7-14.
- 田中陽子・栗山和広・園田順一・柴田良一 (2001). 小学生・中学生の無気力感と攻撃性の関連性 (1) 九州保健福祉大学研究紀要, 2, 143-148.
- 田中陽子・栗山和広・園田順一・柴田良一 (2002). 小学生・中学生の無気力感と攻撃性の関連性 (2) —「学級雰囲気」「教師サポート」「友人関係」が与える影響について— 九州保健福祉大学研究紀要, 3, 107-111.
- Tangney, J. P., Hill-Barlow, D., Wagner, P. E., Marschall, D. E., Borenstein, J. K., Sanftner, J., Mohr, T., & Gramzow, R. (1996). Assessing individual differences in constructive versus destructive responses to anger across the lifespan. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 780-796.
- 反中亜弓 (2008). 中学生における対人場面別怒り表現尺度作成の試み 感情心理学研究, 15, 13-23.
- 寺坂明子 (2011a). 子どもにおける怒りの類型化の試み 感情心理学研究, 18, 163-172.
- 寺坂明子 (2011b). 児童期・思春期における怒りの多次元的特徴 発達心理学研究, 22, 298-307.
- 塚本貴文・濱口佳和 (2003). 親和動機と攻撃性および社会的スキルが友人関係満足感に及ぼす影響中学生の場合 筑波大学発達臨床心理学研究, 15, 45-55.
- 塚脇涼太 (2018). 児童・生徒のユーモアが学校適応に及ぼす影響 対人コミュニケーション研究, 6, 1-12.
- 塚脇涼太・樋口匡貴・深田博己 (2009). ユーモア表出と自己受容, 攻撃性, 愛他性との関係 心理学研究, 80, 339-344.

- 塚脇涼太・深田博己・樋口匡貴 (2011). ユーモア表出が表出者自身の不安および抑うつに及ぼす影響過程. *実験社会心理学研究*, 51, 43-51.
- 梅津直子・新井邦二郎・濱口佳和 (2012). 中学生における関係性攻撃と認知特性および適応との関連——敵意帰属を中心に——. *筑波大学心理学研究*, 44, 69-78.
- von Salisch, M. & Vogelgesang, J. (2005). Anger regulation among friends: Assessment and development from childhood to adolescence. *Journal of Social and Personal Relationships*, 22, 837-855.
- von Salisch, M., Zeman, J., Luepschen, N., & Kanevski, R. (2014). Prospective relations between adolescents' social-emotional competencies and their friendships. *Social Development*, 23, 684-701.
- Watson, H., Rapee, R., & Todorov, N. (2017). Forgiveness reduces anger in a school bullying context. *Journal of interpersonal violence*, 32, 1642-1657.
- Wainryb, C., Pasupathi, M., Bourne, S., & Oldroyd, K. (2018). Stories for all ages: Narrating anger reduces distress across childhood and adolescence. *Developmental Psychology*, 54, 1072-1085.
- 山口修司・中條和光・前田健一 (2002). 暴力行為等の問題行動に関する発達的研究(4) 広島大学心理学研究, 2, 187-194.

(2019年2月8日 受理)